

聖書箇所：ルカの福音書7章18～23節

説教題：あなたですか？

## 1 獄中のヨハネ

### (1) 本当にメシアなのだろうか

昨年三月に起きた震災で苦しむ人たちの姿を見て、私たちは様々なことを考えました。地震や津波で亡くなった方が一万五千人を超えたと聞き、いのちの大切さをまず覚えました。一方、生き残った人たちが、この先どうすればよいのかと希望を失い、悲しい表情をしているのを見ました。いのちはもちろん大切です。けれども生きるためには希望が必要なのだと改めて思われました。ですから、今年こそは希望にあふれる年であって欲しいと誰でもが願っていることだろうと思います。

その希望のことについて、今日は考えて参ります。洗礼者ヨハネはふたりの弟子を呼び、イエスのところに行き、このように聞いてくれないかと依頼しました。「おいでになるはずの方は、あなたですか。それとも、私たちはほかの方を待つべきでしょうか。」

ヨハネが直接イエスに質問できなかったのには訳がありました。彼は獄中にとらえられていました。ルカの福音書3章19、20節にそのあたりの事情が説明されています。

「さて国主ヘロデは、その兄弟の妻ヘロデヤのことについて、また、自分の行った悪事のすべてを、ヨハネに責められたので、ヨハネを牢に閉じ込め、すべての悪事にもう一つの悪事を加えた。」

ヨハネはイエスをよく知っています。直接自分が洗礼を授けました。その時ヨハネは叫

びました。「見よ、世の罪を取り除く神の子羊。」(ヨハネ1章29節)ヨハネはイエスを見て、この方こそ救い主であると確信しました。しかし今はその確信が揺らいでいます。「本当にあなたなのでしょうか。」

### (2) ヨハネが考えていたメシア

なぜ揺らいでしまったのでしょうか。ヨハネは筋金入りの信仰者です。その行動も非常に積極的で、物怖じすることがありません。悪事を重ねるヘロデに対し、悪いものは悪いと堂々と主張しました。殺されるかもしれないということは覚悟の上です。事実、ヨハネは後に首を切られて殉教していきます。それほどの人であったのに、なぜかヨハネは揺らいでしまいました。どうしてでしょう。

そのことを考えるヒントは、7章の1節から16節にあります。ここには二つの出来事が書かれています。一つ目はローマ軍の百人隊長の部下が死にかけていたのにイエスによって救われたこと。二つ目は、なくなったひとり息子を生き返らせ、母親の手に戻したという出来事。これらの出来事は逐一ヨハネにも報告されました。

ヨハネはそれを聞き、考え込んでしまいました。イエスこそ、このイスラエルを救うために神が遣わしてくださった神の子羊である。そう確信してきた。だからきっとイエスは、イスラエルを苦しめているローマ軍をイスラエルから追放する。そのための準備を着々と進めるはずである。

いやそればかりではない。イスラエルも神に救われるためには、もっともっと悔い改めなければならない。だから自分はヨルダン川で罪の悔い改めのことを人々に説き、罪からきよめられるようにと洗礼を授けてきたのだ。もし悔い改めをしないのなら、神はさばきをもってこの民を滅ぼすに違いない。イエスが本当の救い主であるなら、必ず罪を悔い改めない人々を責め、さばくはずである。これがヨハネの考えていた救い主のイメージでした。

ところが、ヨハネの耳に聞こえてくるイエスの姿は、ことごとく期待を裏切ります。イエスは、ローマ軍を追放してくれるはずと思っただけなのに、なんと敵である百人隊長の部下を救ったとは。イエスは、イスラエルの罪を指摘し、厳しく責め立てるはずと思っていたのに、ひとり息子を亡くしたやもめのところに行き泣いていたとは。

そんなことをしている場合ではないはずだ。国のトップに立つヘロデの罪を見よ。この国の人々の心は荒れ廃れ、モラルも地に落ちてしまっている。イエスが救い主であるなら、必ず罪を責め立て、さばきをなさるはずだ。しかしどうだ。ヘロデのことについては何もしない。しないどころか、期待とはまったく反対のことばかりをしている。本当にあなたは救い主なのだろうか。それとも、別の方を待つべきなのだろうか。

## 2 イエス

### (1) 見なさい、聞きなさい

ヨハネの質問に対し、イエスはこう答えます。「あなたがたは、行って、自分たちの見たり聞いたりしたことをヨハネに報告しなさい。目の見えない者が見、足のなえた者が

歩き、ツアラアトに冒された者がきよめられ、耳の聞こえない者が聞き、死人が生き返り、貧しい者たちに福音が宣べ伝えられている。だれでもわたしにつまずかない者は幸いです。」

イエスのことばはいつも謎めいています。ヨハネは最初こんな答えを期待していたはずで、「そうです。わたしです。」あるいは、「いいえ。わたしではありません。」ところがイエスのことばはそうではない。そうなのか、そうでないのか、結論めいたことは語らないのです。

では何を語ったのか。二つのことがあります。一つは、あなたがたの目でよく確かめなさい。あなたがたの耳でよく聴きなさい。いったい何が行われていますか。どんなことばが語られていますか。それをよく確かめなさい。それが一つ。

### (2) 旧約に示されたメシア

そして二つ目。あなたの目と耳で確かめた事実を旧約聖書と照らし合わせてみなさい。一致しますか、一致しませんか。どうですか。イザヤ書35章4, 5, 6節にこうあるのではないですか。「神は来て、あなた方を救われる。そのとき、目の見えない者の目は開き、耳の聞こえない者の耳はあく。そのとき、足のなえた者は鹿のようにとびはね、口のきけない者の舌は喜び歌う。」

何も考えず、ただひたすら盲目的に信じなさいと言ってるのではありません。イエスは待つべき方がどなたであるか、正しく知る方法を非常に合理的な方法で示しています。まず事実をよく確かめなさい。その上で聖書と照らし合わせてみなさい。もし違っているのなら、待つべき方はわたしではない。しかし

もし一致しているのなら、待つべき方が誰であるのか、あなたがたは言わなくてわかるはずである。

### 3 私たちは誰を待つのか

ヨハネは、救い主がどなたであるのかわからなくなりました。では、ヨハネの信仰は間違っていたのか。そうではありません。次回に触れますが、イエスはその後ヨハネのことを高く評価します。ヨハネが混乱したのは一つの理由がありました。神はもう一つの大切なことをされることに、ヨハネは気がつかなかったのです。

それにはヨハネの性格も関係していたかもしれません。彼はヘロデ王を責め、牢獄に投げ込まれてもへこたれません。死ぬことは覚悟しています。正義心の塊。曲がったことは大嫌い。白黒ははっきりつけなければ気が済まない。そんなヨハネの目から見れば、イエスのやっていることは生ぬるい。神は罪を責め立て、さばき、悔いあたらめた者だけを救われる。そう確信していました。

ところがイエスの方法は違っていました。神が私たち罪を責め立て、さばく前に、神ご自身が私たちの罪を背負われ、神ご自身がさばきを受けられる。人間をさばく前に、神ご自身がさばかれていく。それが神の救いの方法だったのです。

もし救い主という方が、ヨハネが考えたとおりの方であったならどうなっていたでしょう。異邦人である私たちはさばかれて終わりです。たとえ異邦人でなくても、信じる前は罪の告白などしようと思わなかったのですから、そんな人間は救われる余地はありません。つまり私たちには希望がないことになる。

しかし神のみこころはそうではない。神は私たちをひとり残らず救いたいのです。救うためならどんな事もいとわない。ご自分が十字架でさばかれることになったとしても、喜んで引き受けてくださる。

ヨハネの目には、イエスはなにもしていないようにしか見えなかったでしょう。けれども、実は見えないところで、聖い神である方が私たちの汚い罪を背負おうとされていました。それがどれだけつらく、痛みを伴うことだったのか、ヨハネは気がつかなかった。

なぜそこまでされるのでしょうか。私たちに希望を与えるためです。たとえ山が動き海の大波が頭の上におおいかさぶることがあっても、神が与えてくださる希望は絶対に動かない。取り去られることはない。なぜなら神ご自身がいのちを捨ててくださったのだから。

見えないものを何も考えずにただ信じなさいと言われていたのではありません。イエスは言いました。「見てみなさい。聞いてみなさい。すでに何が起きていますか。何が語られていますか。きちんと確かめたなら、神の救いは確実にあなたがたのところへ届いていることに気がつくはずです。」

新しい年の最初の日に、私たちは、待つべき方はこの方であること、そしてこの方こそ私たちの変わらぬ希望であることを覚えて歩み出したいと願います。